

氏 名 狩野 正明
学位の種類 博士 (医学)
学位記番号 甲第444号
学位授与年月日 平成27年9月25日
審査委員 主査 教授 丸山 理留敬
副査 教授 木下 芳一
副査 教授 鈴宮 淳司

論文審査の結果の要旨

頸部リンパ節転移は、口腔扁平上皮癌 (OSCC) の重要な予後因子であり、頸部リンパ節郭清は治療上も重要な意味を持つが、術前に転移の有無を評価することは非常に困難である。リンパ節転移の評価にはDNA解析等いくつかの報告があるが、いずれも手技が煩雑であるため簡便かつ再現性の高い術前予測法の確立が望まれる。申請者のグループは、過去に病理学的に確認された頸部リンパ節転移例pN(+)と非転移例pN(-)では、原発巣の核形態に違いがあることを見出しており、本研究では、客観的核異型度解析法によるOSCCの頸部リンパ節転移の予測法の確立と、リンパ節転移のリスク因子を明らかにすることを目的とした。

対象は、島根大学医学部附属病院歯科口腔外科および長崎大学病院口腔外科にて頸部郭清術 (一部リンパ節生検) が施行されたOSCC 88例 (男性56例:女性32例, 平均年齢64.6歳, 舌52例:歯肉25例:頬粘膜4例:口腔底7例) である。分化度は、高分化型65例, 中分化型19例, 低分化型4例であった。また, pN(+)症例は46例, pN(-)は42例であった。生検標本 (HE染色) 画像をパソコンに取り込み, Mac Scope softwareにて, 5項目 (核面積と周囲長, 円形度, 針状比ならびに核面積変異係数) を解析した。核解析結果に対し, pN(+)とpN(-)症例間でt検定を行った。さらに, 解析結果, 年齢, 性別, 分化度, 原発部位等すべての項目でロジスティック回帰解析を行った。

その結果, 核面積と周囲長はpN(+)症例で有意に高値を呈した。円形度はpN(+)で小さく, 針状比はpN(+)症例で大きく, また核面積変異係数はpN(+)症例で大きかったが, いずれも統計学的有意差は認めなかった。ロジスティック回帰解析では, 核異型度解析結果にカットオフ値 (核面積: 80.3 μm^2 , 核周囲長: 32.7 μm) が見出せた。また, 臨床的な因子のうち, 年齢 (65歳未満) も頸部リンパ節転移のリスク因子になることが明らかとなったため, これらを組み合わせれば, 頸部リンパ節郭清の術式決定に寄与することが示唆された。今後はPET-CT等による術前検査に本研究結果を併せ, 口腔癌における頸部リンパ節転移の有無を前向きに調査するプロジェクトが企画されている。